

(別紙2) 審査の結果の要旨

論文題目 『三井越後屋奉公人の研究』

氏名 西坂 靖

本論文は、日本近世が産み出した「巨大店舗」三井越後屋の京都呉服店（京本店）を主な事例に、多人数の奉公人（男性のみ）が集団で起居し労働に従事する特異な社会集団の歴史的特質について、多面的・総合的な解明を試みたものである。

まず「はじめに」において研究史が手際よく整理され、本書の課題・方法が示された後、本論部分は7つの章と5つの補論から構成され、最後に結論がおかれる。

第1章では、近世都市社会において、歴大な奉公人層を抱える巨大店舗の特異性が述べられ、併せて本論文で対象とする三井越後屋各店舗の位相を概観する。第2章では前提として、江戸・京都・大坂の三井各店舗について、18世紀前半から幕末までの奉公人数の動向を追い、その規模の異常な大きさが明らかにされる。

第3章では、1864年（元治元）における京本店の手代・子供・下男からなる奉公人層の全体構造を描き、手代層の位置を確認する。続く4～7章は、京本店の手代層について、その存立構造を精細に分析する。第4章は、手代の事例を網羅的に摘出し、個別事例の検討を含めて、昇進過程（昇進する者の比率や年齢）の実態を解明する。また補論1・2において、暖簾分けの具体相や、「中年者」（ほぼ17才以上の元服後に入店する者）の性格が明らかにされる。第5章では、元手銀をはじめとし、小遣い・褒美・割銀などからなる手代の報酬の全体像を検討し、退職時にどの程度の資金を獲得したかを明らかにする。

第6章・7章では、手代を中心とする奉公人の規律化とその矛盾について取り上げる。6章では「改勤帳」を素材に、欠勤時間の状況と管理を軸に、規律化の様相を明らかにし、ついで7章では18世紀末「批言帳」を分析し、規律違反の様相と経営側の対応について検討を加える。そして「むすびにかえて」で奉公人集団の組織化・規律化という視点から、三井越後屋の奉公人が近世社会において占めた位置について総括を試みる。

本書の主要な成果は、以下の4点である。

1. 三井越後屋京本店の歴大な分量に達する奉公人関係史料を博搜・分析し、詳細なデータとともに、特に手代層の全体像を初めて具体的に明らかにした。
2. このような多人数の奉公人集団を抱える店舗の特異性を、近世都市の「巨大店舗」論として提起した。
3. 規律への服従と勤勉を強要する経営主体＝三井家同族団と、これに対する手代層における不服従、自立的行動という、両者の矛盾関係を鋭く解明した。
4. こうした手代層の自立性の根源が、退職時に元手銀を得て小経営の主体となるという欲求・通念にあることを説得的に論じた。

本論文は、分析作業量の歴大さとその緻密さ、論点摘出の的確さ、論理と叙述の明晰さ、などの諸点においてきわめて高い水準に有り、近世史研究のみならず、隣接分野にも大きな貢献となる重要な成果である。子供や下男などを含めた奉公人の全体像解明は未着手であり、また京都などの都市社会と巨大店舗との関係構造の分析があまり見られない憾みはあるが、本審査委員会は、上記のような顕著な成果に鑑みて、本論文が博士（文学）に十分値するとの結論を得た。